13. 令和２年７月豪雨による学校の被災と復旧の課題
－熊本県立高等学校の被災事例－

廣内大助・竹内裕希子[1)]・内山琴絵[2)]・福永万里子[3)]・小池則満

1. はじめに

令和２年７月豪雨水害において、熊本県では７月３日夜から４日昼にかけての降雨によって、主に球磨川流域では氾濫による大きな被害が発生した。球磨村の特別養護老人ホームでは、浸水深が約９ｍに達し、入所者14名が命を落とすという大きな被害が報告されている。この豪雨による熊本県での人的被害は死者65名、行方不明者２名、重傷者15名、軽傷者36名を数え、また住家被害は、全壊1401棟、半壊3109棟、床上浸水290棟、床下浸水426棟であった（熊本県，2021）。また国道の寸断や鉄道被害も甚大であり、橋梁や路盤の流失が相次ぎ、JR九州肥薩線、くまがわ鉄道は令和３年５月現在も不通である（写真１）。

写真１　流失したJR肥薩線の鉄橋

本水害では球磨川流域や熊本県南部にある多くの学校が被災し、教職員や生徒にも人的物的被害が生じた。水害の発生は平日の日中ではなく、夜間から翌休日にかかる時間帯であり、生徒や教職員が在校するタイミングではなかったものの、当時の対応や復旧過程において多くの課題を残した。本報告では、被災学校への現地調査と教職員へのヒアリングを実施し、学校の被害状況を明らかにした上で、学校におけるいくつかの課題について報告する。

2. 学校の被災状況

本調査対象は、熊本県立のＡ高等学校である。Ａ高校は熊本県南部の有明海沿岸地域に位置し、農業科や福祉科など３科からなる全校生徒数213名、教職員44名（2020年７月時点）の学校である。Ａ高校では氾濫した河川からの水が校舎１Ｆの床上にまで浸水するなど、大きな被害を被った（写真２、３）。学校に隣接する宿舎にいて浸水状況を確認された校長先生の話では、７月４日午前４時ころから急に増水して河川が氾濫し、30分足らずで家から出られず、多くの人が家に取り残される状況であった。翌７月５日の11時頃に校長先生が初めて学校に入ることができる状況であった。７月６日から教職員が学校に集まり、安否確認や学校の復旧作業に取り組んだ。

3. 安否確認、学校再開準備作業

生徒、教職員について、罹災証明を受け取った生徒は29名であり被災した生徒はいたものの、幸いにも生徒と教職員に死者は出なかった。６日より毎朝会議室で安否確認を行った。確認できない生徒の氏名を記録し、確認でき次第順次消していく作業を行った。安否確認や状況確認は、安心・安全メールのアンケート機能を活用して、

床上浸水、床下浸水、被害なしの項目を設けて連絡したが、学校周辺の携帯基地局が被災したため電波状況が悪く、当初返信は殆んどなく、担任が自身の携帯等で直接連絡をとっている状況であった。安全安心メールは普段の連絡でも使用していたが、アンケート機能の利用はあまりなくそういった点での戸惑いはあった。反面、安否確認以降は、ボランティア関係など活用の機会があった。

構内の復旧作業は、場所、時間を管理職にて決定後、作業を行い終了後再度集まって、進捗と翌日の予定を相談しながら進めた。復旧作業はコロナ禍にあって大きく呼びかけはできず、先生方に加え、個人参加の住民、生徒が中心となった。被災していない周辺地域からの支援の中で、重機を持ってきてくださった土木業者様の支援が極めて有効であった。

電気設備は設備業者などの作業によって、７月８日に２階の電灯だけが復旧し、順次作業をしたがエアコンの復旧は８月４日となった。エアコンなしの作業が体力的に厳しく、授業再開後も40分授業とした。水道は７月14日から使用可能となった。鉄道も７月20日より代替バスにより開通したことで、学校再開のめどがついてきた。

被災した生徒からの聞き取り調査により、制服はメーカーより支援頂いた。教科書などは国庫補助対象分を申請し、支給を受けた。持ち物が無い被災した生徒は多少引け目を感じる人もおり、被災していない生徒との間で少し温度差を感じる部分があったようである。

支援物資も食料から衣類、扇風機までご支援いただいた。衣類など含め多くは生徒に配布した。仕分けや配布は事務室の職員が中心となって行った。一方、古いタオルなど困る品もあった。

4. 今後の取組みと課題

今回の被災を通じて、多くの課題があった。避難訓練については火災と津波や地震に対応したものはしていたが、水害訓練の経験はない。今後は２次避難計画の策定と訓練が必要であるが、水害が予測される事態では登校させない仕組みも重要である。また登下校や在宅時など学校以外での避難や防災意識をどう育てていくかが課題である。

有事に機能する安心・安全メールについても、普段からの利用があったが、アンケート機能など含め、災害時の動きに必要な機能を普段から使っておくことが必要である。

今回の水害では校舎１階が浸水し、学校の重要文書などが被災した（写真４）。熊本地震の経験から、低い位置にものを置くことが裏目に出た部分もあった。浸水想定エリアに位置する学校では、今後重要資料や非常物資の保管は２Ｆ以上とした方が良く、理想的には職員室や校長室を２Ｆに設ける方法が有効である。

復旧作業についてもコロナ禍であったが、生徒や地域のボランティアの活躍が随分と助けになった。様々支援頂くなかで困ったのは「何が要りますか？」という質問である。支援物資の到着と必要時期は、ずれることが多く、実際にはお金等の支援が有効に機能しているようである。

これら学校が被災した経験を、教職員や生徒など、学校として持ち続けていくことも課題である。今回の経験を学校として一つの形にまとめておくとともに、研修の機会などを通じて、将来へ継承していくことが必要である。

謝辞

被災後未だ復旧途上でヒアリングを快諾いただき、案内いただいたＡ高等学校長、事務長、教職員の皆様に心より感謝申し上げます。調整いただいた熊本県教育委員会にも感謝いたします。ありがとうございました。

引用文献

熊本県（2021）令和２年７月豪雨情報HP：https://www.pref.kumamoto.jp/site/r2-gouu/

１）熊本大学大学院先端科学研究部・准教授

２）信州大学教育学部特任助教

３）熊本大学大学院先端科学研究部・研究員

写真２　指差し位置まで浸水した

写真３　乾燥後に膨張しめくれ上がる教室の床

写真４　浸水し濡れた重要書類を乾かす